

## 持続可能な日本茶文化継承への一考察

### —大学生による日本茶ボランティア経験がもたらした影響分析—

山本 芳華

#### はじめに

日本茶は日本人の日常生活の中でなじみのある飲料である。近年において、核家族化が進み急須で日本茶を分け合うことが少なくなり、気軽にペットボトル飲料として日本茶を飲む若い世代もふえた。また、嗜好飲料の多様化も伴って、日本茶の消費量は減少している。それに伴い、茶の生産現場も影響を受けているのが現状である。さらに、本論文が対象とするボランティア実施場所となった京都府和束町は、有数の日本茶生産地であるが、少子高齢化の影響で、茶業従事者としての労働力を町内だけで賄うことが大変難しい状況になっている。そこで、町外から、茶業の一番忙しい人手が必要な折には労働力を賄う必要があり、今回のボランティアは地域における日本茶生産の継承の一助ともなっている。

本論文では、ボランティア実施地域の和束町を概観したうえで、茶生産地域での日本茶ボランティアに参加した大学生に実施したアンケート調査データを分析することによって、若者世代の食生活における日本茶の位置づけを明らかにする。さらに、茶生産地域での体験が、その後の日本茶に対する嗜好にどのように影響を与えたのかについて考察した。また、このボランティア体験をもとにして、日本茶体験型観光を実施する場合の考察も行った。以上をもって、持続可能な日本茶文化継承への一考察を行いたい。

## 1 日本茶ボランティア実施地域

### 1.1 和束町の概要

今回のボランティア実施場所となった京都府和束町は、京都府の南東部に位置しており、面積 64.93 km<sup>2</sup>、人口 3312 人（推計人口 2022 年 9 月現在）である。また、宇治茶産地の重要なエリアとなっており、宇治茶の 4 割弱を算出する。とくに、抹茶の原料になる碾茶（てんちゃ）生産については、全国でも上位にある。和束川と森林によって、霧が立ちやすい場所であり、その霧によって強い太陽の日差しが遮断され、お茶のうまみがさらに引き出されるという気象条件に恵まれている。また、美しく広がる茶畑の風景が評価され、2013 年には、日本で最も美しい村連合への加盟が認定されている。



地図 京都府相楽郡和束町

### 1.2 和束町の人口推移と産業構造

和束町の人口推移については 1960 年 6889 人であったところから徐々に減少し、2010 年には、4482 人となっている。和束町の産業は、茶業が基幹産業となっており、京都府にて茶園面積、荒茶生産量、荒茶生産額ともにトップクラスの地位にある。ほかの農林業、商工業は、減少傾向である。観光業については、年間で 75,571 人の入込数があるが、観光の消費額として一人あたりの消費額は 1360 円と低い。地域にいかに関光コンテンツを磨くことが課題となっている。これに対して、和束町は、世界文化遺産登録も念頭に置いた茶生産の美しい景観維持や茶産業の振興、茶文化の発信などを進めている。また、『「お茶の京都」和束茶カフェ周辺エリア地区マスタープラン』などで、観光を含めたまちづくりをすすめている。様々な活動主体

が関わり合いながらまちづくりを進めてきている。このようなネットワーク構築をローカル・ガバナンスの観点から述べたものに梅原（2020）がある。本論文でとりあげる日本茶ボランティアを実施したおぶぶ茶苑は、外からの移住者による活動として紹介されている。日本茶をキーワードとして、さまざまな活動が和束町で自主的に行われている。

### 1.3 和束町と日本茶

和束町は日本茶の生産量が京都府でもトップクラスであり、和束茶としての独自ブランド化も行っている。近年煎茶は一番茶でみると減産となっているが、抹茶人気を受けて碾茶生産量が増加したことによって、収入が安定している。茶取引価格については、高値で取引されている。しかしながら、この基幹産業である日本茶生産を支えるだけの人手や人材が不足しているのが現状である。少子高齢化の影響で、茶業に従事する労働力を町内だけで賄うことが大変難しい状況になっている。あわせて、新型コロナウイルスの蔓延の影響から外部からの人材流入が難しくなり、茶業繁忙期に一番忙しい人手の確保が困難になった。今回の大学生日本茶ボランティアが重宝された背景ともいえる。

## 2 日本茶ボランティア活動

### 2.1 日本茶ボランティア募集

平安女学院大学では、実習科目においてボランティア活動を実習時間として充当する取り組みを行っている。本論文では、日本茶の茶産地である京都府相楽郡和束町にて日本茶の生産、製造、小売をおこなっている組織である、おぶぶ茶苑<sup>1</sup>にて実施したボランティア活動を取りあげる。このボランティアは、2021年7月から12月の期間に実施された。朝9時に現地に集合し、お昼休みおよび随時の休息を含む18時終了のスケジュールである。このボランティアは、希望者の自主的参加申し込みとなっている。図1のポスターにて、7月上旬より募集を開始し、28名の学生が参加申し込みを行った。ボランティアは1日から参加が可能となっている。内容は、茶畑での生産、茶工場での製造および販売補助、イベント手伝いなど日本茶にかかわる多様な活動となっている。



図1 茶畑ボランティア募集チラシ

### 2.2 日本茶ボランティア参加学生へのアンケート調査概要

日本茶ボランティアに参加した学生に対して、2022年1月17日から24日にかけてボランティア実習のフィードバックのためのアンケート調査を行った<sup>2</sup>。調査内容は、ボランティア参加状況の把握、および和束町や日本茶と日常生活とのかかわり、およびボランティア参加前後での変化、さらには日本茶ボランティア経験を踏まえて、このボランティア活動を体験型観光とする場合の意見徴収などである。アンケート結果において、28名の回答があった。また、このアンケート調査はウェブアンケート方式によって実施した。

### 2.3 日本茶ボランティア参加者の属性と参加状況

参加学生のうち、3年生が一番多く22名、2年生が4名、4年生が2名となっている。ボランティア参加日数(N=28)は、図2のように、参加日数は1日間から11日間となっている。複数日数の参加が大多数であることがわかる。参加人数が一番多かったのが、3日間および5日間であり、各5名である。トータルで131人日の日本茶ボランティアが実施されたことがわかる。参加平均日数は、4.6日間となっている。

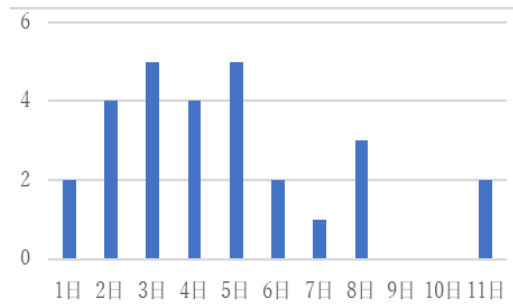


図2 日本茶ボランティア参加日数別参加者数

図3は、ボランティアにおける作業内容である。お茶の袋詰め作業、お茶の包装・ラベリング作業、茶畑での除草作業が多い。ボランティア活動時期によって、収穫作業や茶摘みイベントのお手伝いや顧客への発送作業、やぎのお世話と活動内容は多岐にわたっていたことがわかる。

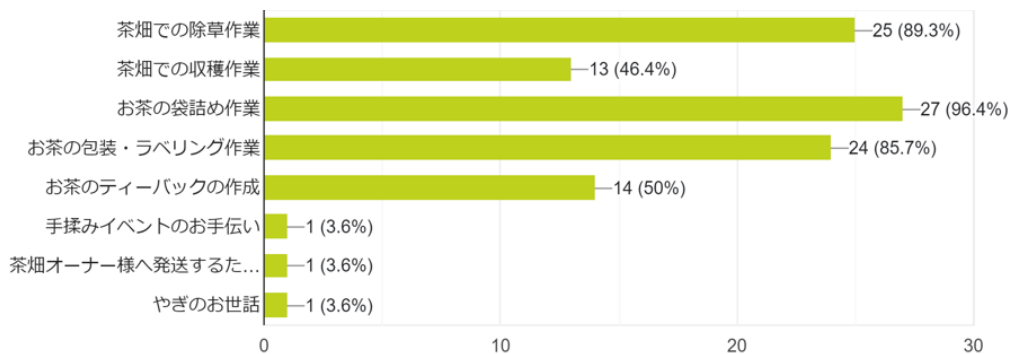


図3 ボランティア内容 (複数回答) N=28

さらに、日本茶ボランティアで有意義であった作業についてたずねたところ、お茶の袋詰め・梱包作業との回答が15名と半数以上であった。また、茶摘みとの回答が4名、イベント時の茶もみやほうじ茶の製造、草むしりとの回答もあった。今回のボランティア期間は複数月にまたがっていたこともあり、期間限定の茶摘みやイベント補助ができた人は限られており、全体として季節問わず活動のある袋詰め・梱包作業の回答が増えているものと考えられる。

## 3 日常生活における日本茶

### 3.1 日本茶にかかわる経験の有無

今回のボランティア参加者にボランティア参加前に茶畑で茶摘みや製茶の手伝いなどの作業の体験があったかどうかをたずねたところ(N=28)、「ある」と答えたのが2名(7.1%)であり、その他の26名(92.9%)は「ない」との回答であった。また、これらの体験は何を通じて行ったものかについて質問したところ、1名は、茶生産者の手伝いとして実施しており、他1名は学校行事の一環としての回答であった。そもそも、このボランティア活動前に茶畑を見たことがあるかどうかについてたずねたところ(N=28)、あるとの回答が13名(46.4%)、ないとの回答が15名(53.6%)であった。また、「ボランティア活動で訪れた和束町が京都府を代表する茶産地であることを知っていたかどうか」(N=28)については、「知っていた」との回答が1名(5.6%)、「きいたことはある」が7名(25%)、「しらなかった」が20名(71.4%)という

結果となった。さらに、ボランティア以前に和束町を訪れたことがある学生は、2名（10.7%）であり、それ以外の26名（89.3%）は今回のボランティアで初めて和束町を訪れたこととなる。茶畑そのものを見たことがない学生が半数以上となっており、和束町が茶産地であることそのものについて知らなかった学生が大多数だったことから、日本茶生産地域は日常生活をおこなっている地域とは大きな隔りがあることがわかる。

### 3.2 日常生活と嗜好飲料としての日本茶

日本茶が日常生活の中でどのように飲まれているのかについてたずねた結果についてまとめたい。「日本茶は好きですか？」（N=28）という設問に対しては、28名全員が「好き」との回答をしている。「普段どのようなお茶を飲んでいますか？」（N=28）という複数回答可の設問に対しては、ペットボトルのお茶が一番多く、19名（67.9%）、続いて、やかんで煮出したお茶が15名（53.6%）、急須で淹れたお茶、ティーバックのお茶が12名（42.9%）となっている。お抹茶も4名（14.3%）の回答があった。

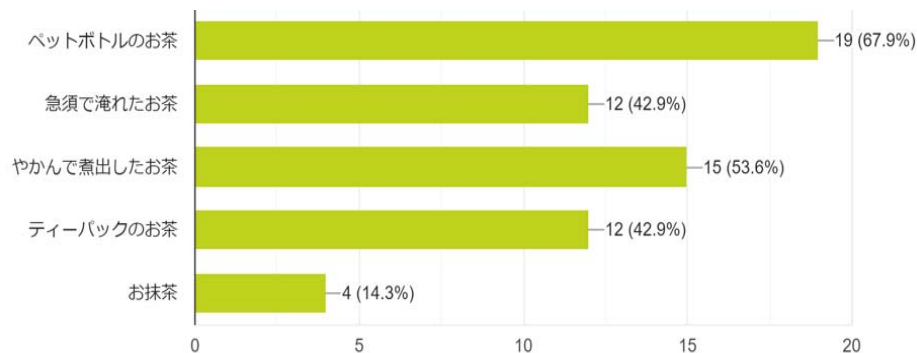


図4 普段に飲んでいるお茶の種類（複数回答） N=28

また、「自分で買うお茶はどのようなものですか？すべて選んでください」（N=28）という設問には、ペットボトルのお茶を買うが26名（92.9%）となっており、圧倒的多数となっている。また、ティーバックのお茶との回答の6名（21.4%）やお茶の葉（ティーリーフ）を買う3名（10.7%）という回答の他に、自分ではお茶は買わないという回答も2名（7.1%）あった。

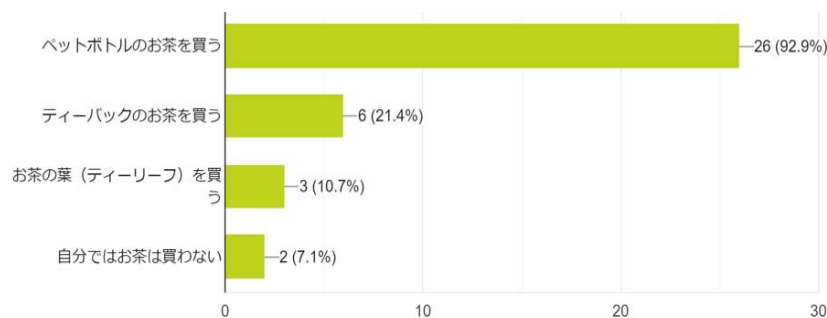


図5 自分で買っているお茶の種類（複数回答） N=28

また、「お茶で好きなもの（日本茶に関する飲み物）をすべて選んでください」（N=28）という設問に対しての回答が図6である。ほうじ茶21名（75%）や抹茶20名（71.4%）、紅茶20名（71.4%）が上位となっている。玉露や煎茶に限らず、ラテやミルクティーをはじめ様々なお茶を好んで飲んでいるのがわかる。

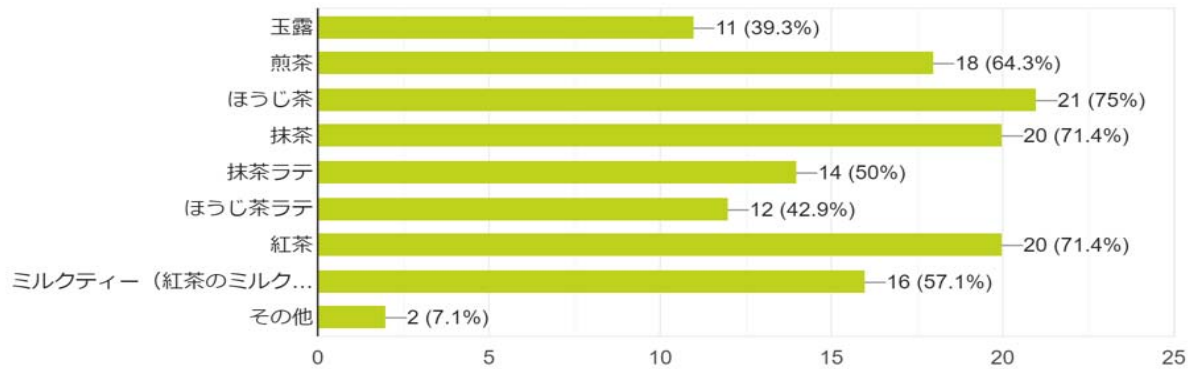


図6 お茶で好きなもの（日本茶に関する飲み物）（複数回答） N=28

また、普段よく飲むものについてたずねた設問については、日本茶（緑茶）が18名（64.3%）で一番多く、その次にミネラルウォーター16名（57.1%）、麦茶15名（53.5%）が続いている。全般的に様々なお茶を飲んでいることがわかる。

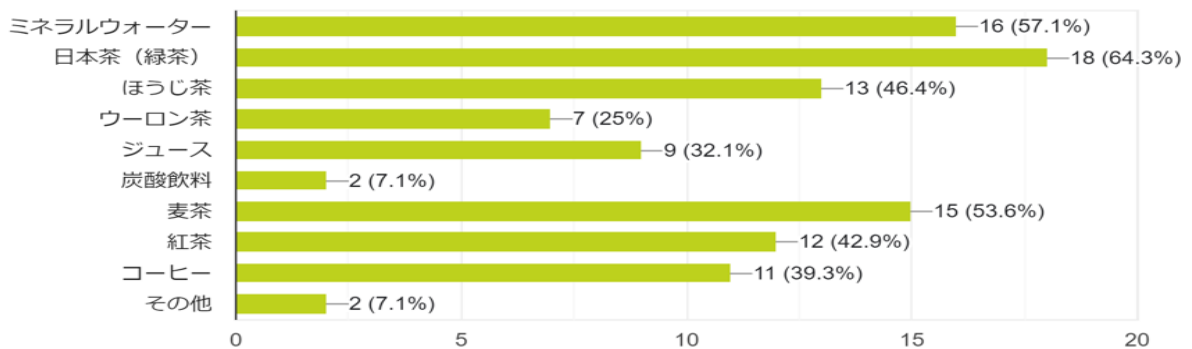


図7 普段に飲んでいる飲み物（複数回答） N=28

また、日本茶に関連する茶道具に関して、どのようなものを持っているかについてたずねたのが図8である。湯呑および急須は高い割合で所持していることがわかる。さらに、茶筌、抹茶茶碗、茶杓、棗といった抹茶のお点前に必要となる道具を持っているという回答も見受けられる。

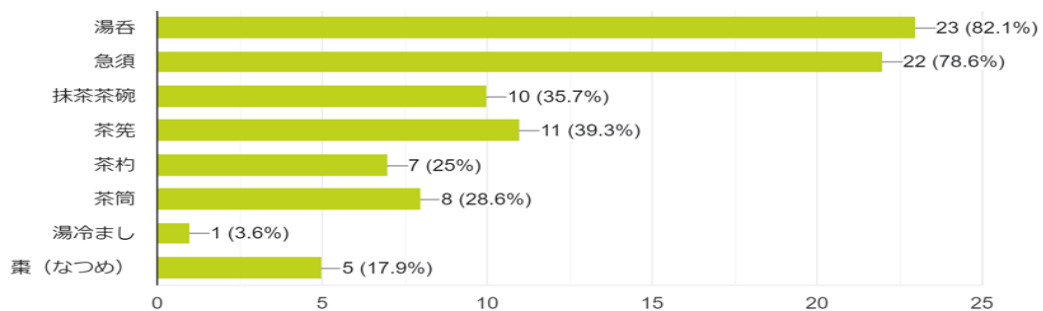


図8 自宅にある茶器（複数回答） N=28



急須で淹れたお茶をどのような場面でどのように飲みたいかという点について明らかにしていきたい。「急須で淹れた日本茶はどんな時にのみみたいですか？」(N=28) という設問に対する回答は以下のとおりである。ゆっくりとくつろいでいるときが21名(75%)、また家族団らんの時が15名(53.6%)となっている。急須のお茶は、時間の余裕を示し、家族との語り合いの場を生み出していることがわかる。

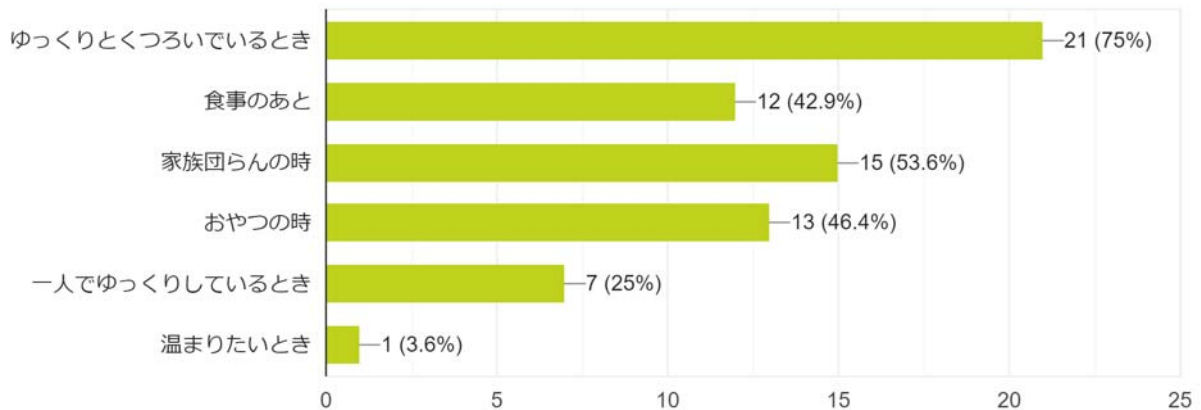


図9 急須の日本茶をどんな時にのみみたいか (複数回答) N=28

また、「急須で淹れた日本茶はだれと飲みたいか？」(N=28) という設問に対する回答は以下のとおりである。両親やおじいちゃん・おばあちゃんといった家族とともに団らんする場に急須で飲む日本茶が選ばれていることがわかった。

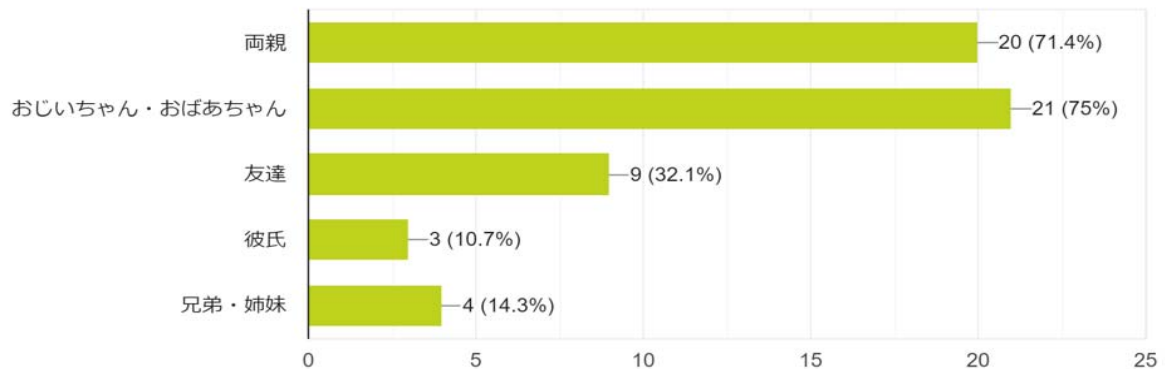


図10 急須で淹れた日本茶を誰と飲みたいか (複数回答) N=28

近年人気が高まっている抹茶スイーツについて好きなものについて自由記載にて回答を求めたところ、アイスクリーム、チョコ、クッキー、ケーキ、かき氷、茶団子、バウムクーヘン、わらび餅、ゼリー生麩、パフェ、ティラミスなどという回答があった。また、食べたことがないのでわからないという回答や、ないという回答もあったが、一般的に抹茶を加工したスイーツが広く楽しまれていることがわかる。

## 4 ボランティア参加による変化

### 4.1 ボランティア参加中の変化

複数回参加している学生が28名中26名であったことから、何日目ぐらいから、場の雰囲気や活動にな

れて、お客様という立場から、現場の一員になれたと感じたのかについてたずねた (N=26)。その結果、3日目という回答が17名であり、一番多く、2日目が5名、1日目が4名という結果になった。この点において、同じように学生ボランティアの影響についてまとめた石田他 (2013) では、東日本大震災でのボランティア参加者の参加期間により習得内容が異なることを指摘している。特に長期で参加した学生に関しては、対人関係能力やコミュニケーション能力の向上に加え、他人を人として尊重する力や地域を基盤とする生活力の向上をなどがみられるという指摘がなされている。これを加味すると図11のタイミングは、はボランティア参加期間の長さにも影響をうけている可能性がある。この点は、今後さらなる分析が必要だと思われる。

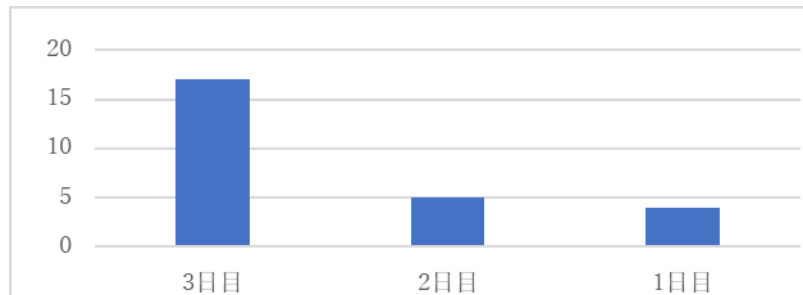


図11 現場の一員になれたという感覚を得たタイミング N=26

ボランティアを行って一番よかったことについて、自由記載をもとめた。この回答についてテキストマイニングを行った。表1は頻出の抽出語リストである。一番多い抽出語は、お茶であり、さらに飲む、作業、経験、交流という文言が続いている。自分の中での経験値が上がり、さらには交流の機会が多くあったこと、友達や人と話すことができたことや、ボランティアによってコミュニケーションが取れたことが満足度を上げているようすがわかる。

表1 ボランティアをして一番よかったこと 自由記載 頻出語上位

	抽出語	品詞/活用	頻度
1	お茶	名詞	23
2	飲む	動詞	6
3	作業	サ変名詞	6
4	思う	動詞	6
5	経験	サ変名詞	3
6	交流	サ変名詞	3
7	好き	形容動詞	3
8	作る	動詞	3
9	種類	名詞	3
10	出来る	動詞	3
11	人	名詞C	3
12	友達	名詞	3
13	話す	動詞	3

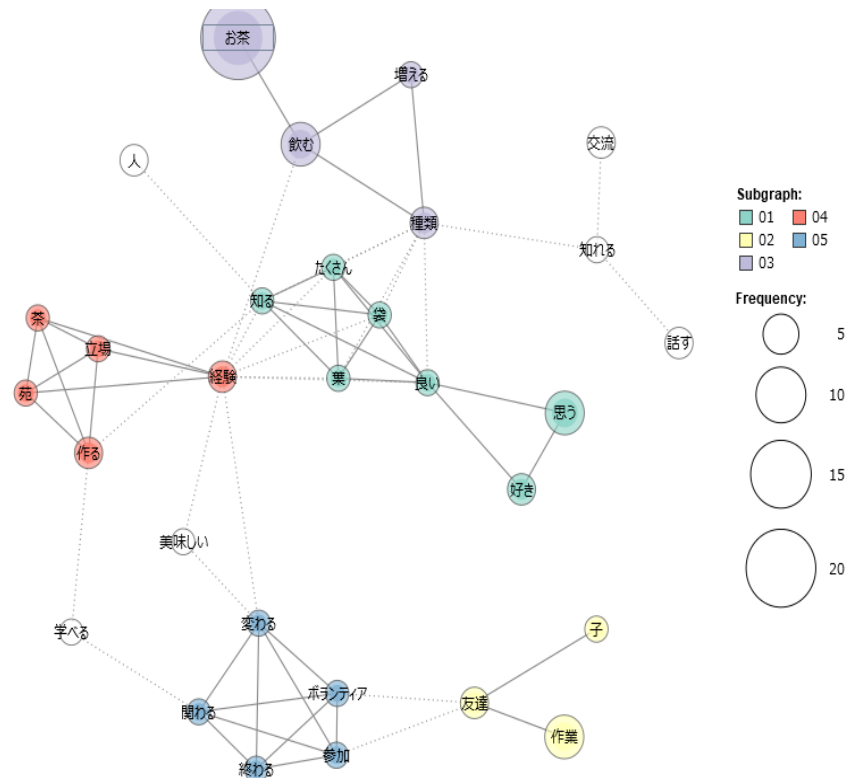


図12 ボランティアをしてよかったこと 共起ネットワーク

さらに、これらの自由記載の回答内容を共起ネットワーク分析した結果が図12である。この記述内容の分析にあたっては、樋口 (2014) で開発した計量的テキスト分析ソフトである KH-Coder を用いている。ここでわかることは、お茶を飲むことが増えたことや、様々なお茶を知れたこと、さらに、お茶についての知識を多く知ることができたということである。また、ボランティアによって、友達や多くの人と交流できたことに対して価値を見出していることが判明した。また、袋詰め作業では、一緒に作業を行っている友達や先輩たちと交流でき、多くの人とかかわることができたという点に価値を見出していることもこの分析からわかってきた。

#### 4.2 ボランティア参加後の変化

ボランティア参加後、日本茶を自宅で飲む機会は増えましたか? という設問 (N=28) に対して、「もともと自宅でよく日本茶を飲んでおり、ボランティアの後も続けてよく飲んでいる」との回答が一番多く、15名 (53.6%) となっている。また、「もともと自宅では日本茶は飲んでいなかったが、ボランティアの後飲むようになった」が11名 (39.3%) 「もともと自宅で日本茶は飲んでいなかったし、ボランティアの後あまり飲んでいない」2名 (7.1%) という回答となった。お茶は好きではあるが、自宅外でのペットボトルのお茶が中心であった生活から、日本茶ボランティアに参加したことをきっかけとして、自宅でくつろぎながらお茶を飲むという機会をあらたに得たことが読み取れる。また、前述のように自宅において茶器がある環境は整っている人が多いため、ボランティア参加後に、自宅でこれらの茶器を使って日本茶を飲むことも比較的容易であったと思われる。





## 5 体験型観光としての日本茶ボランティア

### 5.1 体験型観光コンテンツとしての日本茶ボランティア活動

以上の内容をふまえ、体験型観光のコンテンツとして日本茶ボランティア活動を見た場合に、どのような内容であれば観光として成り立つのかを以下に検討したい。まず、体験型観光として、今回の日本茶ボランティア活動を見た場合に、どれぐらいの期間が適切だと思うかという設問（N=28）に対する回答が図 14 である。半日（5時間）までが5名（17.9%）、1日（8時間）が16名（57.1%）となっており、四分之三が、一日以内との回答となっている。

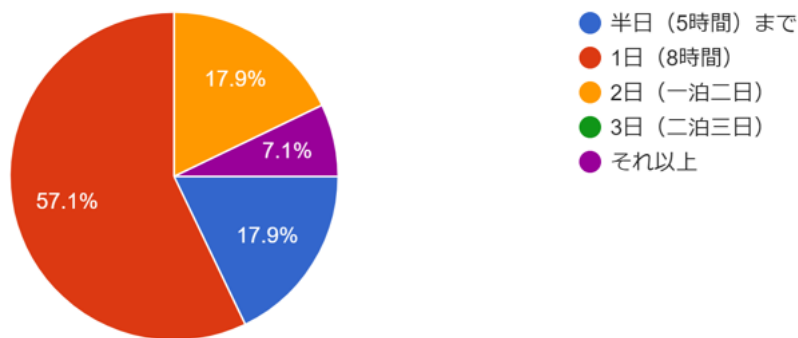


図 14 体験型観光としての日本茶ボランティア活動を見た場合に、どれぐらいの期間が適切か

また、自由記載で、今回のボランティア活動のような内容を体験型観光として行うならば、どのような内容が妥当だと思うかについて自由記載で尋ねたところ、今回のような内容でよいという回答が多く見られた。特に茶の収穫について言及しているコメントが11名と多かった。さらに日本茶の栽培から製造販売、さらにお茶を飲むところまでを体験し、お茶づくりの全工程について理解できる内容が望ましいという回答も複数あった。袋詰めやバック詰めという回答も多かったが、これは、作業中の参加者同士や茶園の方とのコミュニケーションが楽しいという側面がある。お茶のおいしい飲み方や料理への活用などの伝授や、新しい商品開発という意見もあった。また、観光の最終目標が、お茶のソムリエになれるプログラムという意見もあった。いずれも、実際の体験により、日本茶をさらに深く知ることができるような内容が示されている。

## 6 持続可能な日本茶文化継承への一考察～まとめ

若い世代においても日本茶を好む傾向がみられ、ペットボトルやティーバックで日常的に飲用している。茶畑での経験によって、さらに日本茶を深く理解したうえで日常生活においても日本茶を楽しんで飲んでいる傾向が見て取れた。さらには、体験型観光として今回のボランティアのような作業を行う場合には、半日から1日が望ましいと回答した学生が四分之三となった。また、現場での作業そのものだけでなく、現地でのコミュニケーションにより、いろいろな話が聞けたことなどが体験の満足度を上げていることも分かった。以上より、日本茶ボランティアの体験は、その後の日常生活における日本茶に対する嗜好にプラスに働いていることが判明した。こうした日本茶にかかわる取り組みが、持続可能な日本茶継承へとつながるものと考えられる。

## 謝辞

日本茶ボランティアにあたり、学生たちのボランティアをあたたく迎えてくださったおぶふ茶苑の皆様には心より感謝の意を表したい。とくにおぶふ茶苑の松本裕和氏には、多方面の調整を含め全面的にお世話になった。深くお礼を申し上げたい。日本茶ボランティアに参加し、アンケート調査およびインタビュー確認に協力いただいたボランティア参加の学生にも深く感謝する。

平安女学院大学 国際観光学部 教授

## 註

- 1 おぶふ茶苑では、日本茶の製造販売のみならず、イベントや茶畑オーナー制度、世界各国から研修生を受け入れるインターン制度などの実施を積極的に行っている。この様子については、ホームページに詳しい。おぶふ茶苑 ホームページ <https://www.obubu.com/> 2022/10/26 アクセス
- 2 このアンケート調査は平安女学院大学研究倫理審査規程に基づいて、個人情報保護して実施した。

## 参考文献

- 1 梅原豊 (2020) 「民を起点とした、中心のないローカル・ガバナンスの生成と形成、発展について：京都府和束町のまちづくりの変遷を通じて」『同志社政策科学研究』22 巻1号 pp.137-151.
- 2 石田易司・谷内祐仁・脇坂博史・福山正和 (2013) 「学生の災害ボランティア活動と教育効果」『桃山学院大学社会学論集』第47巻第1号 pp.61-86.
- 3 樋口耕一 (2004) 「テキスト型データの計量的分析 —2つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』(数理社会学会) 19(1), pp101-115.
- 4 和束町 (2011) 『みんなで創る ふるさと わづか未来プラン 和束町第4次総合計画』
- 5 和束町 (2015) 『和束町人口ビジョン』
- 6 和束町 (2015) 『和束町地方創生総合戦略』
- 7 和束町 (2016) 「お茶の京都」和束町カフェ周辺エリア地区マスタープラン